

鯨 研 通 信

第 354 号

1984年 4月

財団法人 鯨類研究所 〒136 東京都江東区大島3丁目32番11号(大島町ビル)電話 東京 (683) 3621~2
日本捕鯨協会



日 本 海 の 鯨

鯨類研究所 大村 秀雄

はじめに

日本は南西から北東に長く延びた列島であり、その東西或いは南北両岸に、昔から鯨が回遊して来た。つまり太平洋側と日本海から九州西岸にかけての二つの海域であるが、その双方に鯨が回遊し、日本人は昔からその恩恵に浴して来た。太平洋側はいわば表日本であり、日本海側は裏日本である。表日本のことはよく知られているが、裏日本のことは意外に知られていないことが多い。捕鯨でもそのようなことがあるように思う。例えば今世紀に入って大きく発展した南氷洋の捕鯨も、その基礎は、19世紀の終りから今世紀の初めにかけて、日本海の北の方で静かに台頭しつつあったのである。ここではそのようなことを振り返ってみたいと思う。

伊根の捕鯨

伊根とは京都府与謝郡伊根町のことであるが、ここでは古くから捕鯨が行なわれていた。伊根は伊根湾に面している。その入口に背島がある。日本海から若狭湾に入り込んだ鯨は、湾岸をぐるっと廻って、遂には伊根湾に入り込む。これを見た漁民は漁船を出して背島を中心として、その左右の入口をブロックする。ブロックしたら、この湾内で捕鯨を行なうのであるが、その記録が「鯨永代帳」として残されていて、その年代は明歴2年(1656)から大正2年(1913)までの実に258年間に亘っている。これを見れば捕獲した鯨の種類、体長、捕獲の年月日等が判明する。今は故人となってしまった吉原友吉さんがこれを丹念に調べて、伊根の捕鯨の実態を明らかにした(吉原友吉、1976)。

第1表 伊根における鯨種別捕獲頭数(吉原、1976より作成)

年	ザトウ	ナガス	セミ	計
1656—1700	42	25	6	73
1701—1750	36	35	3	74
1751—1800	33	26	14	73
1801—1850	34	28	10	72
1851—1900	22	31	7	60
1901—1913	—	3	—	3
計	167	148	40	355
%	47.0	41.7	11.3	100.0

第1表はこれを基にして各50年毎の、鯨種別捕獲頭数を示したものである。この表で見る通り、捕獲頭数は多くはないのであるが、ここに回遊して来た鯨の種類を示すものとして、この表は誠に貴重である。数か

ら言えばザトウ、ナガス、セミの順であるが、当時の利用価値から言えば、セミ、ザトウ、ナガスの順であろう。鯨の生物学を勉強している者の立場に立つと、この表には重要な点が2つある。

その1はコククジラが1頭もいないことである。コククジラは極めて沿岸性の鯨であり、回遊をする場合も、沿岸の地形を視察しながら回遊すると言はれる。もち論これは沿岸性であることを強調した表現で、現実性があるかどうか疑問であるが、仮りにこの地方の沿岸にやって来たとすれば若狭湾にも入ったであろうし、若狭湾に入れば、当然伊根湾にも入り、そこで捕まっただであろうと考えられる。したがってコククジラは日本海の東側は通らなかったものと思う。

同じ日本海でも、これより西の山口県北岸や九州西岸でも、江戸時代に捕鯨が行なわれていて、ここではコククジラも捕獲されている。通常アオサギ(青鯨)と呼ばれていた。一体このコククジラはどこから来たのか。その答は1つしかない。朝鮮半島系統の分派がやって来たのである。

現在コククジラは北太平洋にだけ棲息している。これに2系統あって、1はカリフォルニア系統であり、ベーリング海とメキシコ沿岸のカリフォルニア海湾の間を往復する。2は朝鮮半島系統であって、オホーツク海から朝鮮半島の南岸との間を往復する。これが今までの定説であったが、ここで考えられることは、朝鮮半島系統のもの1分派が、朝鮮の東岸からさらに南下して、山口県の見島を通して、萩市の青海島につつかけ来て、ここより西に転じて九州西岸へと向かったと考えるのが妥当であろう。

なおコククジラは江戸時代に、和歌山や高知の沿岸でも捕獲されている。このコククジラは北海道南岸から三陸を経て、南下して来たものと思う。但しその先がベーリング海から来たのか、或いはオホーツク海から来たものか、今の所なんとも断言できない。

第1表で第2の問題点は、ミンククジラが見付からないことである。もともとミンクという名前は、英語の minke から来た名前で、本来の日本語ではない。minke はドイツ人砲手の Meinke から出ている。ノルウェイ式捕鯨が最初ノルウェイ西岸で行なわれた頃マインケというドイツ人砲手がいた。この砲手がシロナガス鯨と勘違いして多数のミンクを捕獲したことから、からかい半分に、あれはマインケの鯨だと言ったのが、ミンクの始まりだという。日本ではコイワツクジラとも言うが、これは英語の little piked whale の日本訳であろう。どうもミンクの本来の日本名はないように思う。ミンクという言葉は、昭和の初め頃、ミンク船が出来た当時つけられた言葉のように思う。このような話を志野徳助さんから聞いたことがあるように思う。

ミンクは今日でも特に北海道ではよく定置に入るし、伊豆半島西岸でも定置で捕ることがある。沼津市のシーパラダイスでは、このようにして捕獲されたミンクを飼育したことがある。若狭湾ではかつて小型捕鯨船でミンクが多数捕獲された(大村と崎浦、1956)。若狭湾に入ったミンクは伊根湾にも入ったものと思う。

進藤さん(1970)によれば昔は能登半島の東西両岸では台網捕鯨が行なわれていた。これはブリ漁に使う台網をクジラ漁に転用したもので、捕れた鯨は体長4—5尋の小さなものに限られていた。これは明らかにミンクであろう。「鯨永代帳」には鯨の体長も記録されていて、大は13.5ヒロから小は2.1ヒロまであり、例外的なものとして20.0がある。当時の鯨の体長の測り方は、例えばセミ鯨などは噴気孔から丸骨(尾羽の付け根附近)までとあり、全長ではなかった。伊根ではどのような測定方法で測ったのか不明であるが、ナガスの中で小さな体長のものは、ミンクであった可能性のあるものと思う。これは他の捕鯨漁場でも同様である。

山口県及び九州の捕鯨

江戸時代に日本海で捕鯨を行っていたのは、前記の伊根や能登半島を除いて山口県である。現在萩市に属する見島、長門市の青海島(通浦)、これより西の瀬戸崎、黄波戸、津黄、立石及び川尻で行なわれていた。これらの捕鯨については多田穂波さん(1968、1978)が詳細な研究を行なっている。

さらに山口県に続いて、福岡、佐賀、長崎の各県沖でも盛んに捕鯨が行なわれていた。

これらの山口県や九州西岸の捕鯨漁場の中で、鯨の種類別捕獲統計がほぼ完備しているのは山口県の川尻である。川尻では元禄11年(1699)から明治21年(1888)までの捕獲統計が大日本水産会報告第104号(1890)に出ているから、それをそのまま第2表として示した。鯨の種類は原文通りとしたが、年号は日本暦で出ているがこれは西暦に改めた。

第2表で見ると、鯨の種類はセミクジラ、ザトウクジラ、ナガスクジラ、アオサギ(コククジラ)、イワツクジラと分けているが、この外に小春と不詳があり、ナガスとイワツは長鬚春、鯧春と、これにも春がつけてある。この春が何を意味するか説明がつけてない。多田さん(1978)によると、当時捕獲された鯨は背美、座頭、長鬚、白長鬚、青鯨、小鯨、鯧の各鯨であった、とあって、春の字はついていない。とすると

第2表 山口県川尻における捕獲頭数 大日本水産会報告104号(1890)による

年	背美鯨	座頭鯨	長鬚鯨	青鯨	小鯨	鯨	不詳	計
1699—1708	29	94	2	11	7	—	—	143
1709—1718	17	103	14	17	8	—	1	160
1719—1728	29	103	3	21	8	—	1	165
1729—1738	31	92	3	12	1	—	1	140
1739—1748	26	93	—	21	—	—	—	140
1749—1758	20	48	—	13	—	—	—	81
1759—1768	14	58	—	15	—	—	1	88
1769—1778	—	—	—	—	—	—	140	140
1779—1788	—	—	—	—	—	—	136	136
1789—1798	—	—	—	—	—	—	117	117
1799—1808	—	—	—	—	—	—	84	84
1809—1818	—	—	—	—	—	—	105	105
1819—1828	19	55	—	8	—	—	37	119
1829—1838	29	27	—	10	—	—	72	138
1839—1848	48	59	4	18	—	—	—	129
1849—1858	23	88	24	37	—	—	—	172
1859—1868	2	55	32	34	—	1	6	130
1869—1878	4	34	65	44	—	—	—	147
1879—1888	3	49	130	19	—	—	—	201
計	294	958	277	280	24	1	701	2,535
%	15.1	49.1	14.2	14.3	1.2	—	6.1	100.0

この春はこの表の編集者がつけたものかも知れない。常識的に解釈すれば春は字の通り季節を示し、春捕獲されたと解すべきであろう。小春は仔鯨であり、種類を問はず一括して示し、これらは春捕獲されたと解することができる。春とは分岐場から栗餌場へ帰る途中の親仔連が捕獲され、統計上は親と仔が別々の欄に含

まれることとなったことを示すものであろう。

上記の多田さん(1978)によれば、この捕獲統計(第2表の原表で各年毎に出ている)は長門市図書館に収蔵されている由である。第2表は1888年で終わっているが、多田さんの本には明治27年(1894)から明治34年(1901)までの毎年の捕獲が鯨種別に出ているか

第3表 山口県川尻における捕獲頭数 多田(1978)による。

年	長 曾	白長曾	座 頭	青 鯨	計
1894	10	1	3	0	14
1895	4	1	0	0	5
1896	7	1	1	4	13
1897	9	2	4	0	15
1898	10	1	4	1	16
1899	8	0	2	0	10
1900	4	1	1	2	8
1901	3	2	13	0	18
計	55	9	28	7	99
%	55.6	9.1	28.3	7.0	100.0

備考 セミ鯨は1884年以降捕獲なし。

ら、これを第3表として示した。

第2表と第3表で見る通り、川尻における捕獲統計は、途中で鯨種別の不明の年もあるが、非常によく整っていると言えよう。これよりわれわれは多くのものを学ぶことができる。なほこれとは別に、通捕には鯨の過去帳が残っていて、これより鯨種別捕獲頭数を知ることができる(木村(大隅)清治、1956)。

第2表と第3表によれば、川尻で捕獲された鯨は、シロナガス、ナガス、ザトウ、イワシ、コクおよびセミの6種類ということとなる。ここでいくつかの問題点がある。第1の点はシロナガス鯨である。シロナガス鯨は網取式ではずっと捕獲されなかったが、明治20年(1887)以降捕獲されるようになった。但しその数は少ない。これは体が大きくて捕獲しにくいということもあるが、大きな理由はその性質であろう。太平洋側では、例えば和歌山や高知の沿岸では、近代の捕鯨業になってからも大正時代は多数が捕獲された。これに反して日本海側では、朝鮮の沿岸でも九州西岸でも小数が捕獲されたに過ぎない。

シロナガス鯨は元来外洋又は深海性の鯨で、南半球では南極大陸周辺の氷海にまで突入するが、北太平洋ではベーリング海には入らない。アリューシャン列島の間が狭ま過ぎるか、或いはベーリング海が浅過ぎるからであろう。

次はイワシ鯨である。イワシ鯨は日本海には入らない。川尻ではイワシ鯨が1頭だけ捕獲されているが(第2表)、これはイワシ鯨ではなくて、おそらくニタリ鯨であろう。ノルウェイ式捕鯨業になってからも、イワシ鯨は大河内(対島)や呼子(佐賀県)で捕獲されたが、これらはイワシ鯨ではなく、ニタリ鯨であった。1955年以來20年間に亘って、支那東海で捕鯨が行なわれた。その最盛期は8月であり、従来の漁期とは全く異なった時期であった。この時捕獲されたのがナガス鯨とニタリ鯨であった。ニタリ鯨は朝鮮沿岸では捕獲されていない。その分布の北限は対島から仙崎を結ぶ線辺りであろう。川尻その他附近の網代で、

イワシ鯨(現実にはニタリ鯨)の捕獲が稀であったのは、捕獲しなかったのではなくて、鯨がやって来なかったからであろう。

第3の問題点はアオサギつまりコクジラである。これについては既に述べた通り、朝鮮半島の東海岸を南下して来た朝鮮半島系統の1分派が、見島を通過して、青海島に達し、そこより西に向って来たものと思う。掃りはこの逆を通ったものと思う。

次はナガス鯨であるが、網取式の時代には最初はあまり捕獲されなかったが、段々捕獲が多くなって来ている。これは主要鯨種のセミ鯨とザトウ鯨が少なくなったため、これを補う意味で捕獲が増大したものと思う。近代の捕鯨の時代となり、ノルウェイ式で捕獲されるようになって、最も重要な鯨はこのナガス鯨であった。日本の沿岸ばかりでなく、韓国の沿岸さらに現在中国に属する海洋島の附近でも最も重要な鯨であった。しかしながら生物学的には少しもわかっていない。今まで科学調査をやったこともない。

ただ前にも述べたように1955年から約20年に亘って支那東海でナガス鯨が多数捕獲された。このナガス鯨を藤野さんが調べて、太平洋系統のナガス鯨とは別の系統群であることを明らかにした(藤野和男、1960、1961)。しかしながら、この支那東海系のナガス鯨と黄海或いは朝鮮半島東岸のナガス鯨との関係はどうか、さらに回遊はどうかといった問題になると何一つ回答が与えられていないのである。なほこのナガス鯨の中にもミンク鯨が含まれていると思われるが、確証は何もない。

残るはセミ鯨とザトウ鯨であるが、この二つは江戸時代の捕鯨の最も重要な種類であった。これは太平洋側でも日本海側でも同様であった。何れも数から言えばザトウ鯨であるが、1頭当たりの価格からみればセミ鯨である。大日本水産会報告第104号(1890)に、明治12年(1879)から同21年(1890)までの、10年間の、川尻における鯨1頭当たり平均価格が出ているから、これを第4表に示した。参考までにザトウを100

第4表 川尻における鯨種別平均価格(1879—1888)。大日本水産会報告104号(1890)による。

鯨の種類	平均価格	ザトウを1とした指数*
セ ミ 鯨	4,362円	3.09
ザ ト ウ 鯨	1,411	1.00
ナ ガ ス 鯨	1,044	0.74
コ ク 鯨	479	0.34
仔(種類込)	44	0.03

* 平均価格より計算

とした他の鯨の指数も示した。これで見ればセミはザトウの3倍の価値があり、ナガスはザトウよりも安い。これよりナガスはあまり大きなものではなかったことが推察される。或いは大きなものもあったが、小さなミンクも含めたため、平均すれば低くなったのかも知れない。

ここでついでに述べたいことはマッコウ鯨である。江戸時代の鯨の本を見ても、マッコウ鯨が記載されており、その図もほぼ正しく描かれている。しかしながらこの時代にマッコウ鯨が捕獲されたのは、1部であったように思う。マッコウ鯨は日本海には入らない。

支那東海では、甌島辺りが分布の北限で、これより北の支那東海や日本海には入らない。したがってこの地方で捕獲されるわけがない。土佐室戸津津組捕鯨史料(1939)には「我土佐ニ於テハ今ヲ去ル五六十年ノ間ニ於テ僅ニ一頭ヲ見ルノミ」とあるから通常は捕獲されなかった。和歌山と三重で小数が捕獲されたものと思われる。

次に捕獲された各鯨種の変動であるが、第2表及び第3表を基にして、これを5期に分けて、それぞれの期の1年平均捕獲頭数を計算すると第5表の通りとなる。これより1700年から1900年に至る200年間にお

第5表 川尻における年平均捕獲頭数の変動(第2表及び第3表より計算)

期 間	コ ク	セ ミ	ザトウ	ナガス	その他	計
1699—1768	1.6	2.4	8.4	0.3	0.4	13.1
1769—1818	?	?	?	?	?	11.6
1819—1858	1.8	3.0	5.7	0.7	2.7	11.9
1859—1888	3.2	0.3	4.6	7.6	0.2	15.9
1894—1901	0.9	0.0	3.5	6.9	1.1	12.4

る鯨の盛衰を知ることが出来る。1年平均の捕獲頭数そのものは11.6から15.9までで特に大きな変動はないが、種類別には大きな変動がある。大きく減ったのはセミ鯨とザトウ鯨である。特にセミ鯨は1858年を境にして大きく減り、遂に1884年以降は全然捕獲がなくなってしまったのである。ザトウ鯨はセミ鯨ほど急激ではないが、序々に減少している。コク鯨も同様である。これに反して増加しているのがナガス鯨である。これは上記の鯨が減ったため、これを補う意味で、人間が努力して捕獲を増大させたと考えらるべきであろう。

19世紀の半ば頃からセミ鯨が急激に減少したのは、アメリカ捕鯨船の操業の結果である。北太平洋における、いわゆる日本漁場は1820年頃発見された。この漁場はマッコウ漁場であるが、日本近海ではマッコウと同時にセミ鯨も大々的に捕獲された。その漁場は日本海からオーホック海、千島列島周辺及びその東側からカムチャッカ半島の東側の広大な区域である。その有様はタウンゼント(1935)の第3図によく出ている。この図は捕獲位置を点で示しているが、日本海は総てこの点で埋まっている。これだけ捕獲されては、セミ鯨資源が急激に衰えるのは当然のことであろう。太平洋側のセミ鯨も同様である。19世紀の半ば過ぎに、和歌山でも高知でもセミ鯨の捕獲は激減している。

大日本水産会報告第116号(1891)に掲載された柏

原忠吉さんの「九州鯨猟ノ盛衰ニ就テ」と題する論文には次のように書いてある。

「……右表ニ拠ルモ我天保八九年(1838、9)ノ頃ハ米國捕鯨船僅ニ一艘ニ過キサルニ僅々五六年ヲ経テ其數二百艘以上ニ及ベリ……嘉永安政(1848—1859)ノ頃我カ九州五島地方ニ外國製ノ鋸ヲ受ケタル斃鯨或ハ皮ヲ剥キタル鯨体ノ漂着セルコトアリシヲ以テ見ルモ外國捕鯨業ノ盛ナルヲ知ルニ足ルナリ……以上余カ簡單ニ説ク処ヲ以テ見ルモオコク海辺ニ於ケル鯨猟ノ盛衰ハ我九州海辺ニ於ケル鯨猟ノ盛衰ト殆ト符節ヲ合スルカ如ク其間密著ノ関係ヲ有スルヲ知ルニ足ラン」。

さらに大日本水産会報告第201号(1899)には高橋新太郎さんの九州の捕鯨業という演説が掲載されているが、それによると、それより50—60年前の天保年間には九州全体で68カ所あった捕鯨場が、今日では生月、小川島、有川の3となってしまったこと、その原因はセミ鯨が減少したためであるとしている。

以上に述べたことは主として川尻における捕鯨であるが、それは当時の捕獲統計が最も整備されているから、これでこの地方全般及び九州の捕鯨まで代表させたのであって、捕鯨業の規模から言えば、九州の方が大きく、いわゆる西海捕鯨は江戸時代の捕鯨では、むしろ紀州や土佐を上廻っていると考えられるが、残念なこと統計特に鯨種別の統計が見付からないから、

前記の川尻で代表させつつもりである。これらの捕鯨については、最近出版された「玄界のくじら捕り」に詳しいから、興味をお持ちの方はこれを御覧願いたいと思う（佐賀県立博物館1980）。

九州の捕鯨で統計が残っているのは、奄岐であるが、これとても鯨種別には出ていなくて、総捕獲頭数である。これは弘化2年（1845）から萬延元年（1860）に至る16年間に、勝本および前目で、益富、倉光の両

組が交替で操業した時の記録である。参考までにこれを第6表に示した（大日本水産会報告第104号）。ここでも19世紀の前半はいい成績を挙げたが、後半になると捕獲は激減している。その直接の原因はアメリカ捕鯨船の操業であり、そのため各地の網組は崩壊するのであるが、その途中でアメリカの技術を導入すべく、ポンプランスが導入されたり、アメリカ式捕鯨そのものが試みられたりしたが、結局大成しなかった。

第6表 奄岐における鯨捕獲頭数（1845—1860） 大日本水産会報告104号（1890）による。

年	勝 本 組		前 目 組		捕獲頭数合計
	組 主	捕獲頭数	組 主	捕獲頭数	
1845	倉 光	60	益 富	78	138
1846	益 富	40	倉 光	45	85
1847	倉 光	42	益 富	32	74
1848	益 富	34	倉 光	40	74
1849	倉 光	14	益 富	11	25
1850	益 富	19	倉 光	19	38
1851	倉 光	22	益 富*	19	41
1852	益 富	7	倉 光	14	21
1853	倉 光	12	益 富*	4	16
1854	益 富	9	倉 光	20	29
1855	倉 光	10	益 富	14	24
1856	益 富	7	倉 光	7	14
1857	倉 光	19	益 富	不 詳	19+
1858	益 富	不 詳	倉 光	7	7+
1859	倉 光	不 詳	永 取	7	7
1860	永 取	4	倉 光	7	11
計		299+		324+	623+
1年平均		21.4		21.6	38.9+

* 春は津吉

ただ不思議なことがここに一つある。それは明治30年代（1897—）に入って、日本にもノルウェイ式捕鯨が導入されるのであるが、鯨の獲り方そのものはノルウェイ式であったが、鯨の解剖はアメリカ式であったことである。

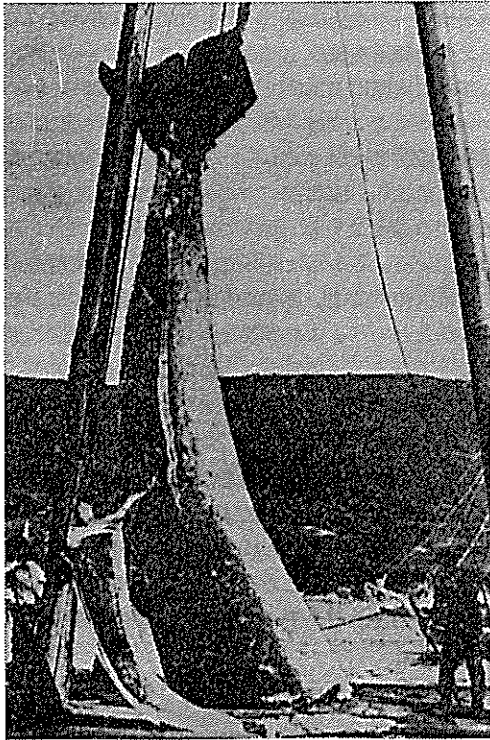
アメリカでは19世紀後半になると、カルホルニア沿岸で、いわゆる沿岸捕鯨が開始された。沿岸の基地からボートを出して鯨を捕獲したもので、鯨はコク鯨とザウト鯨であった。ボートは5人乗りで、他に砲手が1名おり、船首に据付けた砲（グリーンナー砲と呼ばれた）から銃を発射する。銃にはロープが付けてあり、命中すれば鯨を引き寄せて、今度は肩打ち銃でポンプランスを発射してこれを殺す。

捕獲した鯨体は基地に運んで解剖し採油したが、解剖の方法は、帆船時代の舷側解剖であった。実際にマストの代りに丸太をたてて櫓を組み、ここに吊した滑車を通してロープで、水中に浮んだ鯨の脂皮（ブラバー）を剥ぎ取ったのである。

明治時代の日本のノルウェイ式捕鯨業による鯨の解剖は、このアメリカ式を採用していた。ボックスと称して、棧橋の先に高い櫓を組み、鯨を宙吊りにして解剖したり、或は解剖船を使って舷側解剖を行なった。明治20年（1887）頃から日本からアメリカへの移民が始まったと伝えられるが、このような人の中にはアメリカの捕鯨基地で働いた人もいたであろうし、それらの人の、いわば新知識が、当時のボックス解剖と

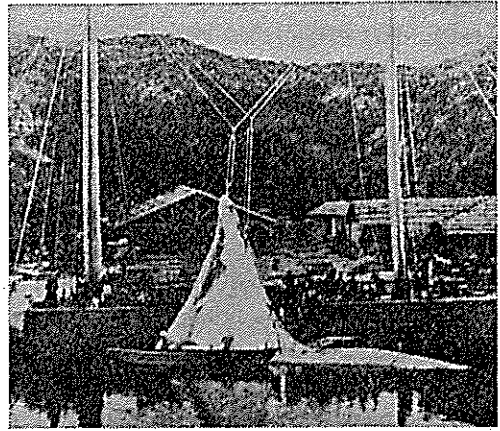
なったものであろう。この解剖方式がいつまで続いたか明らかではないが、明治40年頃の捕鯨事業場の写真、例えば鮎川、大島、二木島等の写真（何れも東洋捕鯨編、本邦の諾威式捕鯨誌、1910に掲載されている）に、このような二本櫓を明瞭に認めることができる。

日本の鯨を最初に科学的調査を行なったのはアメリカのアンドリウス (R. C. Andrews) である。彼はニューヨークの自然史博物館の科学者であるが明治43年 (1910) に来日し、紀州の大島や三陸の鮎川でイワシ鯨を調べた。さらに翌年再び来日して韓国の蔚山でコクジラを調べた。これらは船員役膨大な報告書として発表され、今日でも鯨類研究の古典となっているが、彼はこれらの報告書とは別に、一般向けの本として「砲とカメラによる捕鯨」(Whaling with gun and camera) を書いた。この本は明治時代の日本のノルウェイ式捕鯨を知る上で誠に貴重であるが、残念ながら鯨研にはない。私は読んだことはあるが実物は持っていない。この本の中にはこのボックス式解剖の写真がある。第1図はこれを示したが、この写真で判るように



第1図 明治時代の鯨の解剖 (ボックス式)。
アンドリウス撮影 (タンネセンとジョンセン1967より引用)

鯨を宙吊にして解剖している。どうしてこんな解剖を始めたのかわからないが、これでは不便であり危険でもあったであろうと考える。この外に解剖船による解剖もあった。これは明らかに舷側解剖である (第2図)。



第2図 明治時代の鯨の解剖 (解剖船)
(第1図と同じ)

このような解剖で一番の問題は海水の汚染であろう。人口密度の低い19世紀のカリホルニアではあまり問題にならなかったかも知れないが、人口が多く、しかも沿岸の藻類や貝類に依存している漁民の多い日本では問題であった。明治の末に東洋捕鯨株式会社が青森県の鮫 (現在の八戸市) に、新たに事業場を設けた時、漁民の大反対に遭い、焼打ち事件にまで発展した。これが契機となって、アメリカ直輸入の解剖方法は廃止されたのであろう。

ソ連の捕鯨

日本のノルウェイ式捕鯨はロシアに刺激されたためであるとされている。明治24年 (1891) にニコラス皇帝が皇太子の時日本に来られ、これに随行したカイゼリング伯が、朝鮮半島沿岸に鯨の多いことを知って、帰国後ウラジオストックに捕鯨会社を設立し、韓国沿岸で鯨を捕獲し、その肉を長崎に輸出し、それに刺激されて日本でも近代の捕鯨業が始まったとされている。

これは事実であるが、ロシアが日本海で操業したのはこれが最初ではない。時代はもっと前に溯らなければならない。タンネセンとジョンセン (1982) によれば、ソ連の極東における捕鯨は1850年に溯る。つまり現代の捕鯨業以前に溯るのである。極東で最初に捕鯨を行なったのは O. V. リンドホルム (Lindholm) で

あった。彼はフィンランド生まれのロシア人で、1864年にアムール河の河口附近のニコラエフスクに達し、オホーツク海で捕鯨を行なった。ここで1873年までに鯨65頭を捕獲し、4,710バレルの鯨油と15トンの鯨ヒゲを生産した。鯨の種類は明記されていないが、鯨ヒゲが重視されているから、おそらくセミ鯨であったと思われる。1872—3年にはリンドホルムは南に下がって、日本海で捕鯨を行ない、生産した塩蔵肉皮類は日本に輸出した。この時代の捕鯨はまだ旧式捕鯨であった。

最初にノルウェイ式捕鯨を極東に導入したのはA. G. ディディモフ (Dydymov) である。彼は1887年にノルウェイ式捕鯨船をオスローに注文した。この船は1889年に完成し、同年10月31日にウラジオストックに到着した。彼はこれより東方180キロの地点 (Hajdamak) に根拠地を設けて、直ちに操業を開始し、冬期4カ月の間に23頭の鯨を捕獲した。夏は南に下がって朝鮮半島東岸で操業し、1890年の終りまでに73頭を捕獲して好成績を取めた。冬の苛酷な気象条件にも拘らず、彼は強引に操業を続けたが、彼の捕鯨船は12月31日に出港したまま消息を絶ってしまった。かくしてロシアの最初のノルウェイ式捕鯨は悲劇と共に終わったのである。

その後数回同様の計画がたてられたが、何れも失敗に終り、遂にカイゼリング伯 (Count H. H. Kajzerling) の登場となるのである。彼は太平洋捕鯨漁業会社を設立し、2隻の捕鯨船をオスローに注文し、1895年3月に、ディディモフが使用していた根拠地を買収して基地として、操業を開始した。操業は夏の間 (6月—10月) は基地を出て北方の樺太沿岸にかけて操業して鯨油を生産し、冬は南方の日本海で操業して、生産物は総て長崎で販売したが、日本の鯨肉に対する需要は頗る旺盛であった。

彼には2人のよき協力者がいた。1人はノルウェイ人のH. G. メルソム (Melsom) であり、彼は操業を指揮した。このメルソムは、彼に南氷洋捕鯨に大きく貢献する。母船の船尾に穴を開けてスリップウェイを設け、ここを通して鯨体を解剖甲板に曳き掲げる。そのスリップウェイの考案そのものはサルレ (P. Sørle) であるが、これを実用化したのはH. G. メルソムである。最初の船尾式スリップウェイを装備したランシング (Lancing) を建造し、1925年に最初の試験を行った時は自ら乗船して、技術的改良を行ない、これを成功に導いたのであった。

もう1人はドイツ系のゾンメルマイヤー (A. Som-



第3図 H. H. カイゼリング (左) とH. G. メルソム (右)
(第1図と同じ)

mermeyer) である。彼は製油部門を担当し、その近代化を図った。鯨油はそれまでは木製の樽に入れて貯蔵した。そのためバレルという単位も生れたのであるが、彼はこれを廃して鉄製の容器とした。今日のドラム缶であろう。

彼等の功績は、世界最初の鯨体処理工場船ミハイル (Michail) を作ったことである。この考え方はゾンメルマイヤーの考えに基づいたもので、1899年に3,643トンの貨物船を購入して改装することとなったが、少し後れて実際に工事が行なわれたのは1902—3年の冬ダンチヒに於てであった。同船は1903年7月27日に最初の鯨を受け取ってから、10月21日までの間に98頭の鯨を処理し、鯨油とグアノを生産した。陸上基地で処理する場合よりも、原料で40%多く利用できたと言われている。しかしながらまだいろいろの問題点があり、最大の利益は、日本に売却した肉皮類によって挙げられたという。この事業そのものは一応軌道に乗ったようであるが、1904年2月に日露戦争が始まり、捕鯨船ばかりでなく工場船も日本に拿捕され、事業は破滅してしまった。

これらの拿捕された捕鯨船は、その後日本沿岸で永く捕鯨船として使用されたが、ミハイル丸は鯨の処理船として使用されたことはない。工場施設は陸揚げされたが、使用されたことはなかった。船そのものは美春丸と改名されて、暫くは石炭の運搬船に使用された由である。

ここで付け加える必要のあることはゾンメルマイヤーのことである。彼はミハイル丸に、彼の考案になる、新しい採油装置を作ったが、カイゼリング伯の捕鯨が潰れた後も研究を続け、廻転筒を装備した製油機械を考案し、これをベルリンのハルトマン会社 (R.

A. Hartmann) で試作した。これが俗にいうハルトマン・ボイラーの最初であった。正しくはハルトマン・アパラタス (Hartmann apparatus) はその後改良されて殆んど完全なものとなり、殆んど総ての捕鯨母船に装備されるようになった。

このようにカイゼリング伯の捕鯨は結局は失敗に終わったのであるが、これにより 2 人の優秀な技術者を養成し、彼等がその後の世界捕鯨を大きく飛躍させた、直接の原動力となったことは事実であろう。かくして日本海は、その後発展した南氷洋捕鯨の揺籃の地であったのである。

引用文献

- 吉原友吉 1976 丹後伊根浦の捕鯨。東京水産大学論集。第11号。
大村秀雄・崎浦治之 1956 日本沿岸におけるミンククジラの研究。鯨研英文報告。第11号。
進藤直作 1970 瀬戸内海周辺の鯨塚の研究。
多田穂波 1968 見島と鯨。

- 多田穂波 1978 明治期山口県捕鯨史の研究。
大日本水産会報告 1890 (104号)。1891 (116号)。
1899 (201号)。
木村(大隅)清治 1956 鯨の過去帳。鯨研通信。63号。
藤野和男 1960 鯨研英文報告。第15号。
" 1961 北太平洋産ナガス鯨の系統について。鯨研通信。第119号。
アチック ミニューゼム編 1936 土佐室戸浮津組捕鯨史料。
タウンゼント・C. H. 1935 アメリカ捕鯨船の記録による鯨の分布について。
佐賀県立博物館 1980 玄界のくじら捕り。西海捕鯨の歴史と民俗。
東洋捕鯨株式会社編 1910 本邦の諾威式捕鯨誌。
タンネセンとジョンセン 1967 近代捕鯨史 (ノルウェイ語版)。
タンネセンとジョンセン 1982 近代捕鯨史 (英語版)。

Tursiops truncatus の和名について

長崎大学水産学部 水 江 一 弘

鯨研通信 348 号 (1983年 1 月) で遠洋水産研究所の大隅清治氏が「ハンドウイルカかバンドウイルカか」という一文を書かれているのを目にした。この文の末尾に「皆様方の御意見を聞かせて頂きたいものである」とあったので、どなたか御意見を出されるのではないかと思っていたが、今までどなたも御意見を出されないので、私が取って筆をとった次第である。

魚類では、学名における程ではないが、標準和名についても可成りうるさくて、うっかり変なものを使うものなら、分類学者を自任する大ボス小ボスから集中砲火を浴びる。それに比べて鯨類の分野は、未だにバンドウイルカなんてのがまかり通っているのだから、正に春風駘蕩の観がある。先づ、我々の九州西方海域産小型歯鯨類の研究—I でハンドウイルカという和名を何の説明もなく使用したことが書かれているが、既にその道の大家が権威ある雑誌に理由を挙げて 1936年に提唱され、また 1950年の著書の中でも再度そ

の理由を詳述しているの、我々は至極もっともなことと同意してそれに従ったまでである。引用文献を見ていただければ分ることであり、和名を使うのに一々その理由を説明するような馬鹿はいまい。

次に、私はこの報文の中で大隅氏が指摘されたように「吻が突出している小型歯鯨を有川地方ではハセイルカ又はハセと呼び、三井楽地方と北松地方ではネズミイルカ又はネズミと呼んでいて、ハンドウイルカも一括されてハセやネズミと云われ、小川がのべている如くハンドと云う呼称は未だ当地方において我々は耳にしたことがない」と、それまで離島を歩きまわって得た事実をそのまま書いた。しかし、我々の第Ⅲ報の緒言の終りに「ハンドウイルカの和名の由来については小川が彦岐・平戸・長崎など九州西北海においてハンドと呼んでいると記載しているが、前報において筆者は当地方でこの呼称を耳にした事がないとのべた。しかし、この度の調査の際、有川の古老より、本種は

古来より当地方ではハンド（イルカ）又はハンドウ（イルカ）と称していたが、現在はこの呼称は一般に使用していないようであり、吻の出たイルカを一括してハセ（イルカ）と呼んでいる。と語られ、小川の調査がきわめて正確である事に敬意を表する」と前の発言を我々は訂正している。大隅氏には我々のこの訂正文をこそ指摘してもらいたかった。小川先生が長崎県沿岸をイルカ行脚されたのは1935年頃であり、我々が歩きまわったのは1960年頃である。先生が聞きとりされた年令相の人達には、我々はもうお目にかかるのがむづかしかったにちがいない。

次に、小川先生の「鯨の話」の中に、高野長英の鯨調査行を示す雑録と題するシーボルトの手記が原文のまま写真でのせられている。小さい上に突に分りにくくて私には読めない。その次の頁に先生の訳文があるが、恐らく大隅氏も訳文の方を見たのであろう。小川先生がこの雑録を指摘して訳文を示さなければ、誰も注意を揃わなかったものと思う。その訳文の中にバンドウという言葉が一個所出ている。したがって、勿論小川先生は以前からこの事を承知されていて、これを全く無視され、本種の和名を提唱される時にはこれにふれられていない。多分、本種の和名を論ずる材料としては余りにも貧弱なものであり、この雑録が扱って

いる日本の鯨についての知見が極めてあやふやであったためであろう。先生はあげつらう価値がないと考えられたものと思う。

江ノ島マリーナランドが片瀬海岸の砂浜の中に建設され、アメリカにならって日本で始めてイルカ類を大々的に飼育調教した。全く華々しいことであった。マリーナランドの建設に力を尽して、また事実上の館長であった中島将行氏は正にピカピカであった。我々も佐世保でイルカを飼育調教していたので色々と教えを仰ぎたく、開館も間もない頃に春の学会で上京したついでにマリーナランドを訪問した。その時、飼育していたイルカの標示がバンドウイルカとなっているのを見て私はその理由をたづねた。中島氏の返事は「マリーナランドが関東地方にあり、しかも伊豆でとれたイルカだから関東を意味するバンドウの方がこちらの人達にアピールするので相談の結果バンドウイルカにした」ということであった。イルカの飼育調教では文字通り日本の元祖的存在である江ノ島マリーナランドに、後進のイルカ飼育水族館がすべて右へならえてバンドウイルカにしたのは理解出来る。

しかし、それにしても興行的理由のみで和名がねじまげられたのではかなわない。

せ た し あ

東洋捕鯨株式会社編本邦の諸式捕鯨誌（明治43年刊）に明治15年（1882）より同24年（1891）までの日

本の網取式捕鯨の捕獲総数と同全額が出ているから、参考までにここに掲げた。平均値は当方で計算。

年	操業組数*	総捕獲頭数	総 価 格	1組平均頭数
1882	6	124頭	159,499円	20.7
1883	7	125	122,850	17.9
1884	7	143	112,866	20.4
1885	7	137	109,646	19.6
1886	8	169	114,759	21.1
1887	8	194	160,012	24.3
1888	9	176	162,990	19.6
1889	10	148	172,180	14.8
1890	11	133	150,578	12.1
1891	12	147	180,398	12.3
計		1,496	1,445,778	
年平均		149.6	144,578	

* 太平洋側は浮津と津呂、他は総て西海捕鯨。